

イギリスの中規模大学における大学キャンパスと地域との空間的な繋がり

Spatial Relationship to the Surrounding Area and the Campus of Mid-Size Universities in the UK

住居学科 高取 もえ 薬袋 奈美子
Department of Housing and Architecture Moe Takatori Namiko Minai

抄 録 イギリスにおける 170 大学中 25 大学が学生数五千人から一万人の中規模大学の地域社会への開き方を確かめた。中規模大学が持つ 97 キャンパスを、複数型、分散型、単体型、及びテナント型で分類をすると、複数型が多く、一つの敷地内に複数の建物を持ち、学生が生活できるようにしている。特に地域に開かれたものは、ロンドン大学ゴールドスミス校であった。地域の一般の住居や使われなくなった公共施設のリノベーションを通してキャンパスを拡げた。このことは、地域の住民が通る一般の公道からも学生の学びの様子がわかると同時に、学生も地域の住民生活の中にある刺激を受けながら、社会人の一員としての振る舞いを意識した生活を送ることとなる。大学は、近隣政策を示し、学生のマナー、地域への開放を意識すると同時に、地域の都市マスタープラン策定でも積極的な係わりを行う等、地域を担う重要な位置づけにある組織としての連携に勤めている。

キーワード：キャンパスライフ、地域連携、リノベーション、キャンパス・マスタープラン、学生数

Abstract This study analyzed 25 mid-size universities amongst 170 universities in the UK. 97 campuses were categorized as Multiple, Dispersed, Independent, and Tenant. Multiple was the most common, with multiple buildings in one plot, where students can spend their campus life within the boundaries of the single plot. Goldsmiths, University of London was the most open and merged type of campus. The University bought houses and facilities around the campus and renovated to adapt to the students' learning requirements. This style enabled residents to see what students are studying, as well as all owed students to be stimulated by the local culture and learn how to behave from everyday people's lives. The University established "Goldsmiths Good Neighbour Policy," and tries to behave as a good member of the community.

keywords: Campus Life, Partnership with the Local Community, Renovation, Campus Master Plan, Number of Students

1. はじめに

大学キャンパスは、学生の学習の場であると同時に、地域コミュニティにとっても身近な公共空間でもあり、また多くの学生や教職員が出入りをして影響を受けるものでもある。これまでに、大規模大学についてのキャンパス計画のあり方については、様々な研究が積み重ねられてきている。大規模大学は、キャンパスの存在そのものが、一地域を構成するかのような規模となり、独立したキャンパス計画

の策定が可能である。しかし中規模大学の場合、地域との関係の中でどのように存在しうるのが、キャンパスライフの質に大きく影響する。また周辺地域にとっても、住居や小規模な商店等が、学生・教職員の行動に影響を受けながら生活をする。ことに、日本の大学においては、少子高齢化が進む社会において、どのように地域社会と共存し、それをキャンパスライフの質の向上、更には教育・研究と関係づけられるのかは、大学の質の向上にも影響する。これまでに行われている研究としては、西村 晃三ら

参¹⁾は、大学キャンパスの施設の外部への開放状況について調べ、小篠 隆生^{参²⁾}は、北海道大学におけるオープンスペースの利用者意識をしらべる等している。また、筆者らは既に、アメリカのキャンパス計画が、地域とどのように係わりながら策定されているのかを調査した^{参³⁾}。地域との十分な対話の機会を持ちながら計画を策定し、地域の空間も上手く活用したキャンパスのあり方が可能であることを示した。本稿では、その研究に引き続き、イギリスの中規模大学のキャンパスのあり方を中心に考察し、地域社会と連携したキャンパスライフを送る空間の創り方について検討する。なお研究にあたっては、2018年6月から9月に各大学の公式ホームページ、及び GoogleMap を利用したウェブからの調査で概況を把握した上で、抽出4大学については9月に現地調査を行い、Winchester University 及び Goldsmiths College については、施設計画担当者へのインタビューを行った*1。

2. イギリスの大学キャンパスの概要

イギリス政府が公式認定した学位を授与できる大学は国内に170校ある*2。殆どすべての大学が国立大学であるが、研究・教育に対する取り組み姿勢は多様で、世界の先端的な研究を行う研究者が数多く集う大学から、職能教育に力を入れる大学まである。今回は、大学の規模に注目するが、小規模(5,000人以下)31校・中規模(5,000人以上10,000人以下)25校・大規模(10,000人以上)100校あり、60%が大規模大学であることが分かった。表1に中規模大学の概略を示す。

本稿で取り上げる中規模大学では、25校中17校が10個以上の学部を持ち幅広い学部を学べる学校であることが多く、それに加えてキャンパスを10箇所前後有する様々な地域に学びの機会を提供する学校も複数見られた。一方、キャンパス数が一つの大学は少数だった。小規模大学に関しては Courtauld Institute of Art, University of London や Trinity Laban Conservatoire of Music and Dance のように、“Art” “Music” “Dance” など特化した科目が大学名に含まれていることが多く、何かを専門的に学ぶための大学である傾向がある。

3. 中規模大学のキャンパス形態について

3.1 キャンパス形態の概要

イギリスの大学170校のうち、中規模大学25校(キャンパス数97個)について、インターネット上に、公開されているキャンパスに係わる情報を表1に整理する。一つの大学で複数キャンパスあるものは、キャンパスごとに表示した。その結果、中規模大学でもキャンパスが複数あるものが数多くあり、一つ一つのキャンパスの規模が小さいものが多いことがわかる。また、キャンパスの将来を考え、また地域住民にとって大学が将来に向けてどのような方針を立てているのかを知るすべとなるキャンパスマスタープランを公開している大学は、7校と僅かである。

次にキャンパス内の建物の配置形態について、表2に示すように“複数型”“分散型”“単体型”“テナント型”と4タイプのキャンパス形態に分類した4。中規模大学全体におけるキャンパス形態の傾向を表3に示した。その結果、27個のキャンパスが“複数型”であることが明らかになった。つまり、一つの敷地内で、ある程度の生活が完結し、外部との交流が大学にいる間は起きないという形態である。そのうち4キャンパスに別れている大学で複数型が多いことが読み取れる。少し離れたキャンパスを複数持ち、各々のキャンパスで基本的なキャンパスライフが完結するものの、すぐに外部に出ることのできる形態が多いと考えられる。

キャンパスが外から入る道に分断されている分散型のもは、複数型の約半数の14個のキャンパスで見られた。特にキャンパスが1つのもの、キャンパスが5つあるものに多い。一つの広いキャンパス内に外からの道が入り、学生の生活動線としても公道が使われているタイプのもが見られる。キャンパスが5つあるというタイプのもは、公道を隔てて異なるキャンパスが近接して存在するものもあり、このタイプも、公道をキャンパスライフの中で利用していることと考えられる。それに対し、“テナント型”は The University of Law の Manchester キャンパスと Wrexham Glyndŵr University の London キャンパスの2個のみで、極めて少なかった。なお、キャンパス形態においてキャンパス数が10個以上のキャンパスは、キャンパスマップを公開している大学がなかった。

表2 Campus Types (キャンパス形態分類表)

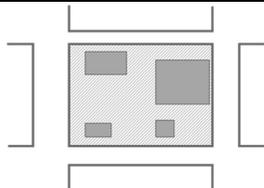
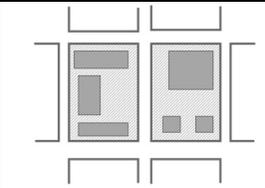
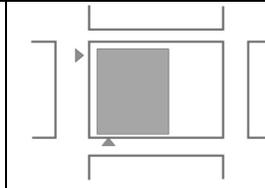
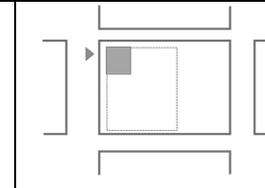
複数型	分散型	単体型	テナント型
キャンパス敷地に主要な建物が集約されている。	キャンパス敷地に公道が通り、各敷地に建物が複数集約されている。	一つの敷地にある一つの建物によって形成されている。	建物の一部をキャンパスとして使用している。
			

表3 Number of Campus and Campus Type

(キャンパス数とキャンパス形態の関係性)

		キャンパス形態				
		複数型	分散型	単体型	テナント型	不明
各大学が持つキャンパス数	1	1	6	0	0	1
	2	4	1	0	0	1
	3	0	0	3	0	0
	4	16	1	4	1	5
	5	3	4	0	0	2
	7	3	1	1	0	2
	10以上	0	0	0	1	34
合計		27	14	8	2	45

表4 Existence of Fence/ Wall and Campus Type

(キャンパス周辺の柵とキャンパス形態の関係性)

		キャンパス形態					合計
		複数型	分散型	単体型	テナント型	不明	
柵の有無	○	20	10	1	0	18	49
	×	5	3	5	2	23	38
	不明	1	1	2	0	5	9

中規模大学では、一つのまとまりのある小規模なキャンパスを複数持つ複数型の大学、外部の人も通ることのある道を挟む形である分散型の大学が比較的多く、いずれも比較的すぐにキャンパス外との接触を持つことのできる形態であるものが多いと言える。

3-2 各キャンパスの開放性の違いについて

学校の開放性を考察するために、学校が有する施設の存在の明確化(図書館・食堂・ジム・寮)・キャンパス周辺の柵の有無・メインエントランスと建物の距離、の3つの軸で考えた。キャンパス数1~5個の大学については、各公式サイトで施設の存在を明確にしており、一つの施設として名前がついていたり、詳しい説明や住所が書かれていることが多かった。一方で、キャンパス数7~13個の大学については、施設の詳しい説明がほとんどされなかった。つまり、外部者が知る機会は少なく、使用してもらおう意志はあまりないと推測できる。

次に、キャンパス周辺の柵とキャンパス形態については、表4に示すとおり“複数型”と“分散型”が柵を有する確率が高かった。“単体型”は柵が無いキャンパスが多かった。メインエントランスと建物の距離については、メインエントランスから大学建物にすぐ入れるキャンパスと、大学建物付近まで距離があるキャンパスの2種類に分類ができた。建物に近いキャンパスは“分散型”に多くみられ、遠いキャンパスは“複数型”に多くみられた。

4. 各学校と地域の関係性

4.1 各学校の施設の立地場所による分類

中規模大学25校から、キャンパスが位置する都市人口百万人以上・周辺に住宅や店舗など人を誘導できる建物がある・公道からでも内部の様子が把握できる、3点に当てはまる大学4校を選出した。施設配置や周辺環境から、学生の学校内での生活形態を表5のように分類した。まず、University College BirminghamとUniversity of Winchesterのように学内生活において、キャンパス敷地内で生活が完結できそうな学校を“完結型”とした。そして、Goldsmiths, University of London(以下Goldsmiths)やSOASのように公道を介する可能性の高い生活形態の学校を“地域拡散型”とした。“完結型”の大学は、公道

表5 Category of Facility Placement and Campus Life
(各学校の施設配置による校内での生活形態の分類)

学校名 (キャンパス数)	キャンパス形態	学校内での生活形態
University College Birmingham (3)	単体型	完結型
University of Winchester (2)	分散型と複数型	完結型
Goldsmiths, University of London (1)	分散型	地域拡散型
SOAS, University of London (1)	分散型	地域拡散型

をあまり介さずにキャンパスの敷地内に必要な施設が揃っているため、一日の生活が完結できるような作りになっている。一方で、“地域拡散型”は各施設から次の施設に移動する度に、街と学校が共存するスペースである公道に出る機会が多く、地域の他の住民との接点生まれやすい。学生のキャンパスライフは大学内だけに収まらず、登下校時以外にも街を日常的に活用する機会が多いことが推測される。

図1に、キャンパス内の生活関連施設である、寮、食堂、図書館、そしてジムをプロットし、更にキャンパス外の飲食店関連施設をプロットした。本章では次項以下で、各大学における地域との空間利用における繋がりを考察する。

4.2 University College Birmingham の地域との繋がり

“完結型”の、University College Birmingham は、図2に示すように全ての生活を一つの建物の中で過ごすことのできるビル状となっている。各キャンパス内で完結することも可能であるが、一歩建物の外に出られれば、地域の飲食店などを気軽に利用することのできる環境である。周辺には多くの店舗があり、キャンパスライフの一環として地域との接点を持つことが容易な環境である。

一方、ビル形のキャンパスでありセキュリティを入り口で管理しているため、外部の人が入ることのできる場所は限定されている。地域のためのレストランやスパを持ち、施設を地域に開いていることが特徴である。学生が生活の場としているキャンパスそのものは閉鎖的であるものの、学生がキャンパスライフを敷地外で送ることも、外部の人が特定目的であればキャンパス内に入ることも容易にしたこと

での地域とのつながりを確認することができる形態である。

4.3 University of Winchester の地域と繋がり

University of Winchester は、完結型と分類したが、キャンパス自体は二つのものが近接しており、学生の行き来がある。もともと子供の教育に力を入れている教会施設が発展した大学であり、幼児・初等教育の研究・実践的な取り組みがあったことから発展した大学である。King Alfred Campus が、古くからあり図書館、食堂も含めた施設がまとまっている。キャンパスライフ自体はキャンパス内で閉じているが、複数の食堂や学生会館、中央部にある図書館、更には教会の建物を様々な用途に使う形で包含しているため、多様性のある生活が可能である。学生の寮は、キャンパス内にある寮建築を利用している学生も多く、キャンパスの中だけで終日生活を完結させることも可能である。公道を挟んだ寮もあるが、道を渡るだけであり、実質的なキャンパス外であるようには感じられない。また町からのエントランスにあたる部分は、図3に示すように建物とその配置が外から人を中に誘導する形態となっている。

一方で、キャンパス外に立地する住宅も、キャンパス外の寮として利用されており、学生が日常的に地域の中に入り込んだ生活をしている。これは、住民との接点を増やし、同時に問題も起こしている。ことに、静かな住宅街で夜遅い時間に学生が騒がしいこともあり、大学の地域とのかかわり方の改善が求められている点である。

また、West Downs Development というキャンパス計画が現在進行中である。新たに建設するカフェやコンビニエンスストアを含む7つの施設は、地域に開ける。学生の学びを発表する場として利用することを意識している。ここでは、コンピュータゲームのデザイン、メディアのセキュリティ等について学ぶ場がつくり、大学内での学びを地域に開いていく場とすることが計画されている。これまでも、学生が地域のイベントで学びの成果を披露する機会はあったが、今回の改善では、大学を地域に開く場を提供することになる。もともと男子高校があった場所を買い取り、より町の中心部や駅に近い場所に、学外に開きやすい場を作ることで繋がりを形成している。

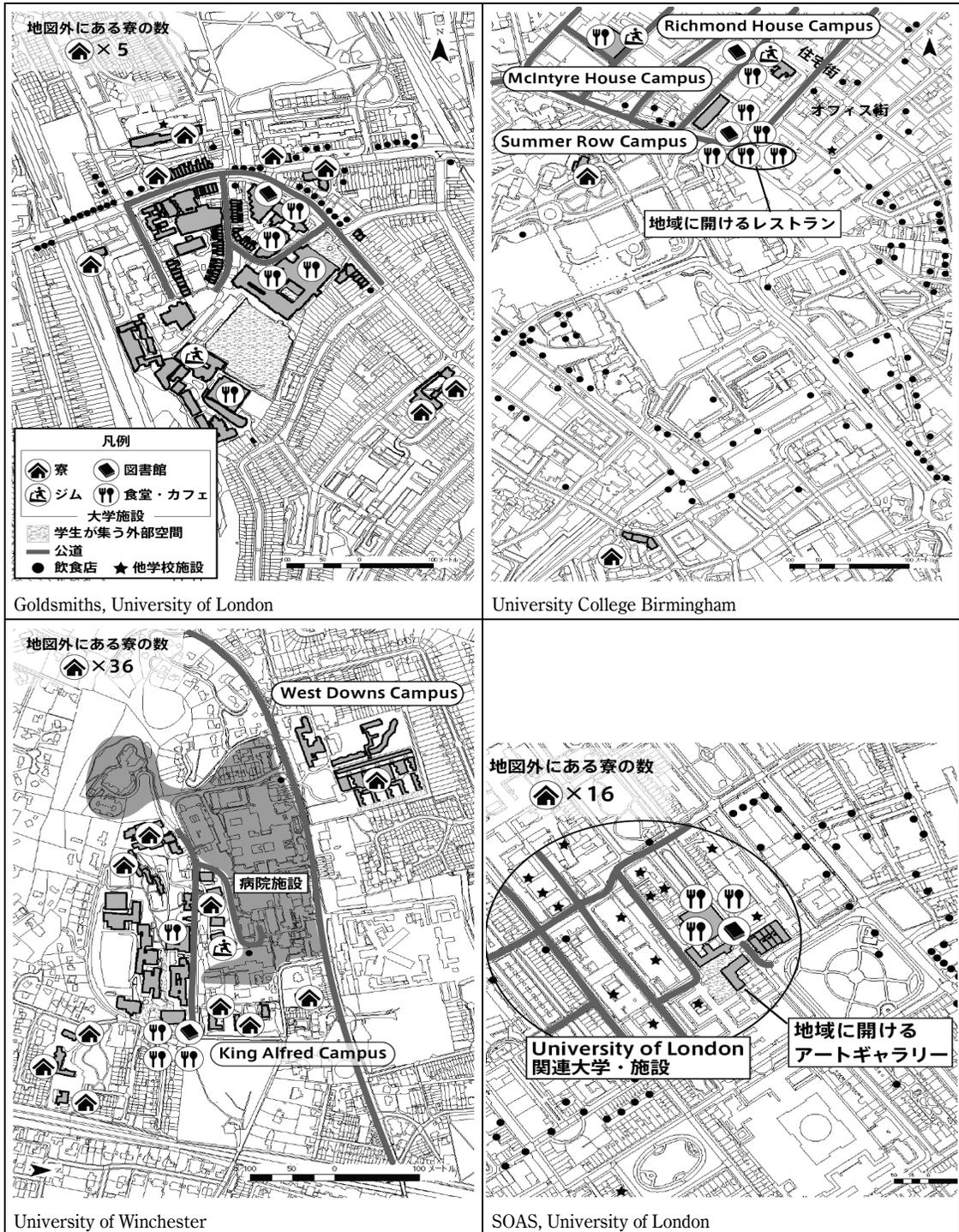


図1 Location of Facilities Necessary for Campus Life (キャンパスライフに必要な施設の立地)

4.4 ロンドン大学 Goldsmiths カレッジの地域との繋がり

Goldsmiths は、ロンドン大学のカレッジのひとつで、ロンドンの郊外部に独立した運営を行っている。デザインの学びで評価が高く、入学希望者が増えている大学である。キャンパスは、地域拡散型の配置である。海軍学校であった建物を大学に転換したもので、広場のある南側が当初のキャンパスであるが、その後周辺の建物が街を抱き込むように拡大した。学生は教室や研究室への移動の際に、市街地内の道路、他の住宅や公共施設がある中を移動することになる。研究室が公道に並ぶタウンハウス（長屋建て住宅）を利用しており（図4）、表札には研究室名が並ぶ。このことは、地域住民にとっても、大学の研究が身近な存在となる環境であり、時には窓に貼ってあるイベント告知ポスターによって研究の内容に気軽に触れることができる。

大都市郊外部の駅に近い商店街をも抱き込むような形でキャンパスが立地することで、学生が日常的に町にいる状況がつけられると同時に、地域住民にとっても、駅から自宅までの日常生活圏の中に大学の研究や学生の学びの一端に触れ、文化・学術的刺激のある生活の場となる。

4.5 ロンドン大学 SOAS の地域との繋がり

SOAS はロンドン大学のカレッジのひとつで、アジア・アフリカについて学び研究する場である。“地域共存型”に分類したSOASは大学の主要建物は3つだが、図5にあるように大学周辺にある他のUniversity of London 関連施設も日常的に使用する⁶。他のカレッジ施設を使用し空間を共有し合いながら、学生の生活は街に滲み出ていく。そもそもロンドンの中心地にあり、高密度な空間利用を求められる立地条件である。住宅地や住民との係わりというよりは、他大学やオフィス街との係わりが生み出される場であり、大学町ならではの特別な空間とも言えよう。

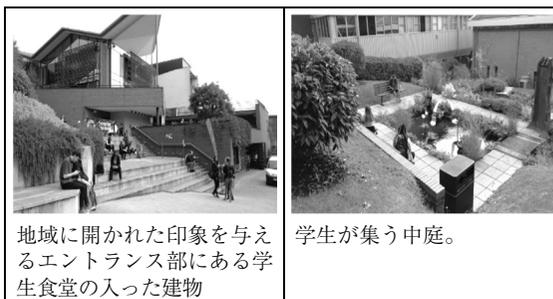
地域共存型に分類はされたものの、キャンパスでの研究や学びの様子が、外部に滲み出しは感じにくい。主要建物が大きく、屋外に内部の個別の表出が滲み出す形状ではない。学生が階段に座る等、人の存在はキャンパス外からも感じられるが、何を学び、何を研究しているのかという大学としてのコンテンツが見える状況とはなっていない。また関係者以外が入ることのできる雰囲気のない形状の建物ではない。



McIntyre House キャンパスはこの建物。

建物の入り口すぐにあるゲート

図2 Campus of University College of Birmingham



地域に開かれた印象を与えるエントランス部にある学生食堂のに入った建物

学生が集う中庭。

図3 Campus of University of Winchester



広場を囲む建物

タウンハウスをリノベーションした事務室棟

図4 Campus of Goldsmiths College, University of London



大学外観。道から建物に入るのみで、屋外の居場所が豊かに用意された空間ではない。

建物入り口部分の様子

図5 Campus of SOAS, University of London

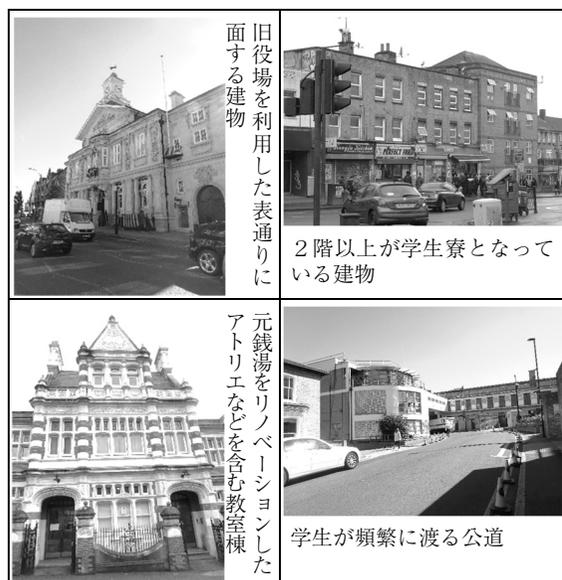


図6 Campus of Bolden the, University of London

分散型で、多くの人が通る道から入り口は近いものの、建物と道との間に豊かな滞留空間があるわけではないために、キャンパスライフは、町を利用したものにはなるものの、大学が地域に与えるインパクトは限定的である。

5. 中規模大学の地域連携型共存に向けたの論考

本章では、4章までに考察をしてきた地域に開かれた中規模大学のありようを踏まえた上で、地域連携型の大学のありようを検討するものである。

“完結型”である University College Birmingham は、地域との連携が見えにくい、外に開いた施設を計画することで地域と繋がりを持つ努力が見られる。University of Winchester は、地域に大学内の学びを発信する施設を意識的に設置し、学内の学びと連携させることを計画している。

一方で、“地域拡散型”は、街の中に常に学生が歩き、街を活用した生活ができる。さらに、街の一部を活用する“地域活用型”と、周辺施設を活用し街に溶け込む“地域共存型”に分類することができる。学生の地域への生活の滲み出しと、地域が大学を理解しやすくなる表出が最も認められたのは、Goldsmithsであった。本章では、特に Goldsmiths に焦点をあてて、地域との連携をどのようにとろうとしているのかをとりあげつつ、地域との共生しやす

い中規模大学のありようについて論考する。

Goldsmiths は、必要に応じて大学周辺施設を購入することにより、規模の拡大を実現してきた。必要に応じて民間住宅を入手し、リノベーションをすることで、研究室や事務空間に転換したのである。図6に示すように、通常の長屋建て住宅を数多く購入している。購入時には、賃借人がいる状態で購入する場合もあるが、その後退去に合わせて大学の施設として時間をかけて転用をするという。転用にあたっては、棟内の戸境壁を撤去するなどして、オフィスや研究室としての利用がしやすい空間となるよう改修しているが、外観は殆ど変えないことで、従来の住宅地らしいまちなみが残る中にキャンパスが存在することになる。寮についても寮専用の建物も建てているが、街中の通常の住居を寮として提供しており、商店街の一階が店舗になっているような建物の2階を使っているような場所もある。

Goldsmiths は、建物の外観を変えないことで、虫食いの的に大学の施設が町に入り込んでいても、自然に馴染む形態となっている。これは学生が、隔離されたキャンパスではなく実社会の中に溶け込んだ学びがしやすいと同時に、住民にとっても身近に学生が存在し、また行われている行事などが垣間見えることで、大学に通う人とその学び・研究の内容を身近なものとして捉えやすくなる空間が生まれている。今後も大学の経営状況等に合わせて、柔軟な転用が可能な空間形態でもあり町の中には、公共浴場や、古い議事堂、教会もあったが、これらも買収する等、譲渡を受けている。こういった大規模な建物については、アトリエ、プレゼンテーションルーム等、天井高が高いことが良い効果を生みうる学びの場として利用されている。つまり、古い建物を利用することで、学生の学びの空間としての多様性にも貢献している。また古い町のシンボルになるような建物を利用することは、街並みの保全という点だけでなく、大学のイメージの向上にも繋がっているものと考えられる。

大学が小さなキャンパスから、町全体に拡がったために、公道を学生がキャンパス内かのように頻繁に往来している。キャンパスの中央部から学生組合の建物に行くためにも道を渡る。そのため危険回避をするために、地元警察と歩行者専用路にする等の交通規制についての相談をしたことがあるが、通貨交通が多いわけではない道路であるから、その必

要性は無いとして現在一方通行とする以外の特別な規制はない。

また大学が大きくなり、地域の様々な施設を使うことで、地域社会での存在感は大きい。当該地区の都市マスタープラン策定にあたって、大学の位置づけについての検討が行われている。策定にあたる自治体も大学の存在は無視できず、学生・教職員に対して、地域のマスタープラン改定にあたっての意見募集を行った。学内の掲示版に、マスタープランの案を示し、意見を募る期間を設けるなどしていた。大学には“Goldsmiths Good Neighbour Policy”（ゴールドスミス 良き近隣方針）（図7）も設けられており、近隣の一員として、学生がどのように生活すべきなのか、また様々な形でコミュニティに大学の構成員が係わることを明記している。特に大学内施設が地域の小売店舗と競合しすぎないように、地域経済を大切にすることが明記されている点が、地域の共存を目指す大学の政策として興味深い。また、大学内のレストランや展示室には、積極的に地域の住民に利用してもらいたいと考えている。地域の一員としての取り組みに積極的な態度をとっている。一方でこのような開放的な使い方をするためには、外部者が入ることが望ましくない空間については、施錠管理をしている。

近隣方針の項目
・ コミュニティの中の学生
・ 学生の態度
・ 騒音、妨害
・ 廃棄物とリサイクル
・ 防犯と犯罪
・ 地元経済への影響
・ 構成員によるコミュニティ活動
・ 交流、リエゾン、パートナーシップ

図7 Goldsmiths Good Neighbour Policy
（ゴールドスミス良き近隣方針）

6. おわりに

イギリスにおける中規模大学に着目し、地域社会への開き方を確かめ、その中でも特に地域社会と空間的な融合が見られる大学について現地調査も含めた考察を行った。170 ある大学のうち 25 大学が学生数五人から一万人の中規模大学である。これらの大学でキャンパスが一つのみというのは5大学しかなく、残りは複数あり、最も多いもので、13 キ

ャンパスにも分かれていることがわかった。中規模大学が持つキャンパスを合計すると 97 確認された。これらのキャンパスを地域との繋がりの方点で分類を複数型、分散型、単体型、及びテナント型で分類をすると、複数型が多く、一つの敷地内に複数の建物を持ち、学生が生活できるようにしている。

更に、25 の中規模大学のうち都市としての環境が整う地域にあるものとして人口百万人以上の都市に立地し、キャンパスプランが公開されていて地域との繋がりがありえる立地状況にある4校について現地調査を行った。特に地域とのしかしそれらのうちキャンパスの形態には、一つの敷地の囲われた敷地の中で複数棟からなり生活をそこで簡潔できるもの（複数型キャンパス 完結型ライフ）、建物が公道を隔てて分かれた敷地に建てられているものの生活はそれらの中で簡潔するもの（分散型キャンパス 完結型ライフ）が一枚ずつであったが、分散型キャンパスで地域に広がる状況でキャンパスライフが確立しているものが2校確認された。特にそのうちのGoldsmiths, University of London では、大学の規模の拡大に合わせて、地域の一般の住居や使われなくなった公共施設のリノベーションを通して、時機にあわせた学生の学びが実現するような柔軟な対応をとっていた。このことは、地域の住民が通る一般の公道からも学生の学びの様子がわかると同時に、学生も地域の住民生活の中にある刺激を受けながら、社会人の一員としての振る舞いを意識した生活を送ることとなる。大学は、近隣方針（Neighbour Policy）を策定し、学生のマナー、地域への開放を意識すると同時に、地域の都市マスタープラン策定にあたって積極的になかかわりを行う等、地域を担う重要な位置づけにある組織としての連携に勤めている。このような関係性を築くことが、地域と共存する大学の今後の姿として、日本の中規模大学でも参考にすべきであろう。

【主要参考文献】

- 1) 西村 晃三, 坂井 猛, 鶴崎 直樹, 趙 世晨, 大学キャンパスの学外開放の実態と都市への貢献性に関する研究, 2010, 日本建築学会学術講演梗概集, F-1, pp485-486, 2010年
- 2) 小篠 隆生, 小林 英嗣, オープンスペースからみたキャンパス計画における大学と市街地との空間的関連と構造, ランドスケープ研究

1997年61巻5号 pp727-730, 1997年

- 3) 原 わかな, 薬袋 美奈子, 大学のキャンパス計画における地域コミュニティの関わり方, 日本建築学会学術講演梗概集 2015, pp739-742, 2015年
- 4) 小篠 隆生, 小林 英嗣, 利用者意識からみた大学キャンパスと周辺市街地の連続性, 市計画論文集 1998年33巻 pp41-246, 1998年

【注】

- *1) University of Winchester は2018年9月26日に Justin Ridgment 氏, Goldsmiths, University of London については 2019年3月12日に Dr.

Nicola Hogan 氏へのインタビューを行った。

- *2) 国が大学として認めているものとして以下に掲載された大学を扱う。(Universities and higher education)

<https://www.gov.uk/check-a-university-is-officially-recognised/recognised-bodies>

なお、ロンドン大学 (University of London) については、カレッジごとに独立した運営を行い、一般的には独立した大学として扱われ、ロンドン大学の名称はこれらのカレッジの連合体としての名称であるため、個々に別大学として調査を行った。